

あーしとヒキオと。

よっちい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、優美子が少しだけ積極的なら、きつとこんな未来もあったのだろうか。そんな優美子の乙女チックな部分をほんのりだした、日常のお話。作者の処女作。短編です。で、どうか、暖かい目でサクッとお読みいただければ幸いです。お声を頂きまして、不定期連載になりました。更新間隔空いてますが生きてます。

目次

あーしとヒキオと。	1
あーしはヒキオと。	14
あーしはヒキオに。	25
あーしがヒキオに。	35
あーしがヒキオに。 後。	41

あーしとヒキオと。

2年生もそろそろおしまいだし、少しは隼人と近づきたい。そんなある日の放課後、あーしは気持ちが高揚して、放課後に隼人を特別棟の空き教室に呼んだ。

「やあ、優美子。」

「隼人……来てくれて、ありがとう」

「なんだい改まって。話って何かな？」

「……あーし、隼人が好き。これからは友達じゃなくて恋人になりたい」

「……優美子、ありがとう。でも、ごめん。君とは付き合えない」

「……理由、聞いてもいい？」

「俺は、誰とも付き合えない」

「……それだけ？」

「ああ」

あーしは隼人の言った理由が本当だと思えなかった。もちろん、思いたくなかっただけなのかも知れない。

「2年はすごく楽しかった。優美子や、皆のおかげで」

「……………うん」

隼人の言う、「皆」という言葉。あれだけ一緒に居たあーしでさえも、周りの女の子達と変わらないんだと思いきらされた言葉だった。

「じゃあ、俺は部活行くから。優美子も気を付けて帰ってくれ。来年もよろしくな」
そういうと、隼人は教室から出て行った。

来年もつて、関係は変わらないじゃん……………なにそれ。

何で舞い上がったのか。2年最後だから？ 3年になったら受験とかあるしその前に楽しみたかったから？ もう、頭の中はパンクしそう。帰って、お風呂でゆつくりしよう。

× × × × ×

「ねえ、君一人？ 俺達楽しいところ知ってつから、遊びにいこうよ！」

帰り道、ラッシュも一波終わってやや人が疎らな駅。あーしはナンパに絡まれている。あんなことがあった手前、あーしも気が滅入っているんだろう。いつもの覇気はなかった。

「……………あーし、急いでるから」

「急いでるならもつと早く歩いてるでしょ？ ウソはよくないな」

「凶星だ。でも、今日は言い返せない。このままじゃあーしはきつとこの男達にどこかへ連れてかれてどうにかなってしまうんだらう。」

「あの、その人うちの連れなんで、その辺で勘弁してくれませんかねえ」

ふと、あーしの後ろから声がした。何だか聞き覚えのある声だ。あーしは、恐る恐る後ろを見た。

「ヒキオ!」

「……お、おう」

何故、ヒキオがここに居るのか。そう思った次の瞬間、ナンパ男達はちよつと機嫌が悪くなっていた。

「なんだお前！ 俺達はこの子と遊んでんだよ！ ガキはさつきと帰れ!」

「嫌がつてる顔してるのに、どこが遊んでるんですかねえ。それと、もうすぐ警察も来ますよ。ここ交番から近いですし」

「……チツ。いくぞ!」

ナンパ男達は立ち去った。程なくして、ヒキオの言った通りおまわりさんはすぐに来てきた。

「ここらこらく。駅前を何を騒いでるんだい？ 君が女子高生にナンパしてらつて男か

？」

「え、いや、俺じゃなくて……」

「おまわりさん。こいつはあーしの友達。ナンパから助けてくれたんだし。ナンパ男は向こうに走ってつたし」

「ひよつとして君がナンパされてる人がいるって通報してくれたのかな？」

「さあ。ちよつとわかんないです。たまたま居ただけなんで」

「とにかくありがとう。僕たちは交番に戻るから、何かあつたらまたおいで。それと、君達も早く帰るんだぞ」

「うす」

「はーい」

「で、ヒキオ。あんたなんでこんなところ居るし」

「本屋行った帰りだったんだよ。困ってる人が居て顔見たら三浦だったからな。あとで由比ヶ浜にぶーぶー言われるのが嫌だったただけだ」

「ふーん、そつか……でも、ありがと」

「お、おう……」

「じゃあ、あーし帰つから」

「平気か？」

「何が？」

「一人で帰って平気かって。あんなことあつた後だろ。近けりや送るが」

「なにそれ。あんたあーしのこと狙ってんの？」

「違えよ。さつきから言ってる通り、由比ヶ浜に何か言われるのが嫌なんだよ。あと、小町にも言われちゃうからな」

「小町？ 誰？」

「妹だ。超可愛い」

「シスコン？」

「違う。ただ妹が好きなだけだ」

「それがシスコンなんだし。まあ、いいや。せっかくだし送ってもらおうかな」

「おう。助かる」

「なんでヒキオがお礼言うし。それはこっちのセリフっしょ」

そのまま、ヒキオに家の近くまで送ってもらうことにした。駅を離れて住宅街に入ると歩道はない。そんな狭い道でヒキオが車道側を歩いてくれるし、さつきみたいなのがいないか結構周り警戒してる。いいところあんじゃん。

車の走る量が減っていくに連れて、沈黙が気になった。

「なんか喋れし」

「ぼっちにそんなこと言うなよ。他人と会話なんてほとんどしないんだから、話題提供とか絶対無理」

「あんた、結衣や雪ノ下さんとか生徒会長とかとよく一緒にいるじゃん」

「あいつらはクラスとか部活が一緒だったり、こき使われてるだけだ。友達は何塚だけだ」

「なんで戸塚だけなんだし。じゃあ、あーしが2番目の友達ね」

「は？　なんで？」

「さっきおまわりさんに言ったつしよ。あーしの友達だつて」

「あれは建前だろ」

「1回言ったんだし、もういいつしよ」

「……わかったよ」

「最初からそう言えつての。じゃ、これあーしの連絡先だから」

「なんで、連絡先？」

「友達だからこれくらいは持ってないつしよ」

「そうなのか」

「そう。今日は助かったし。あいつら今までで一番めんどくさかったし。ありがとう」

「おう、そんな気にするな」

「ここまででいいから。じゃあね」

「おう」

「ヒキオ」

「なんだ」

「ありがとう」

「お、おう」

× × × × ×

翌日、結衣に昨日の話をした。

「その通報した人って、多分ヒツキーだよ」

「そーなん？」

「うん。ヒツキーが人を助けるときって、恩着せかましい？ ことしたくないみたいだし」

「結衣、それを言うなら恩着せがましいっしょ」

「あ、うんうん！ それそれ！」

結衣。姦しいってあーしらのことだからね？ っていうか、ヒキオちよつとあざとい

し。そうだ、いい事考えたし。

Y u m i k o

『通報してくれたの、実はヒキオっしょ?』

『ありがとう』

机でケータイ見てビクッてしてるし。バレバレじゃん。

「ふふ。最初っから素直に言えっつての」

「どしたの? 優美子」

「んーん。なんでも」

八幡

『なんのことだか分からん』

素直になれし。まあ、いつか。

×
×
×
×
×

放課後。あーしは奉仕部に足を運んだ。

「どうぞ」

「ヒキオいる?」

「優美子? どしたの?」

「なんだ」

相変わらず、不思議な構図だ。長机の両端にヒキオと雪ノ下さん、雪ノ下さん寄りに結衣が座っている。

「ヒキオ借りていい?」

「あら、珍しいわね。どういう風の吹き回しかしら」

「相談。ヒキオに相談があるし」

「話聞いただけならここでいいだろ」

「そ。じゃあ、ここで。ヒキオ、あーしと付き合いな」

「はあ!? 優美子? なんでなんで?」

「結衣違うし。ヒキオと出かけるって話」

「あ、なんだびつくりしたー」

「なんで由比ヶ浜がびつくりするんだよ」

「ヒツキーは知らなくていいの！ バカ！」

「なんで罵られなきゃいけないんですかねえ……」

ヒキオ鈍感過ぎっしょ。なんで露骨に照れてる結衣の気持ちに気づかないし。普通の男子ならイチコロっしょ。

と、話を戻さなければ。

「そんで？ 返事は？」

「その、なんだ。出かけるくらいならいいんじゃないか」

「あら、貴方は三浦さんをどう脅したのかしら」

「俺が脅した前提かよ！」

「違うの？」

「違うし。ヒキオは昨日、あーしを助けてくれたんだし。だから、そのお礼。なんか物あげるだけじゃあーしの気がすまないし。とにかく、後で連絡入れるから返事しなかつたらわかってるっしょ？」

「うわ、こわっ」

「あん？ ヒキオ。なんか言った？」

「なんでもありません！」

そこで嘸むなし。ヒキオキヨドリすぎっしょ。

まあ、そんなところもヒキオっぱいか。

……ヒキオっぱいってなんだし。あーし、ヒキオを何を知ってるんだし。

× × × × × ×

その日の夜、あーしはさっそくヒキオに連絡を取ってみた。

Y u m i k o

『今度の日曜、11時に千葉駅ね』

とりあえず、お風呂に入ろう。今日は色々あったしゆっくり浸かろう。隼人のいう、誰とも付き合えないというのはどういうことなのか。他に好きな人がいるから？ それとも何か別の事情？ あーしにはわからないし、あんなに仲良くしてたあーしにすら教えてくれない。ひよつとして、あーしってそんなに隼人のこと知らないのかな。もうわかんないや。

色々と考えている間に、のぼせそうだしお風呂上がろう。

ん？ あーし結構長くお風呂入ってたと思うんだけど、ヒキオ返事遅くない？ さて

はヒキオのやつ、読んでないっしょ。結衣が言ってたっけ。ヒキオに連絡すると妹さんに連絡しないと返って来なかったりするって。

もういつそ電話してしまおう。

『……はい』

『はいじゃないし！ あんた連絡したの見てないっしょ』

『あー、すまん。寝てた』

『え？ そうなん？ じゃ、仕方ないし』

『え、あ、いや。俺が悪かった。連絡返すの面倒でしたはい』

『へえ？ あんたいい度胸してるし』

『いや、マジで怖いからやめてね』

『はあ。それで、今度の日曜日、11時に千葉駅ね。わかった？』

『いや、ちよつと日曜はアレでアレだから』

『なんも予定ないっしょ。ぼっちだし』

『三浦といい、雪ノ下といい、さりげなく人の心抉ってくるのやめてくれませんかねえ』

『とにかく来ること！ いい？』

『はあ。わかったよ』

『それじゃ』

『おう』

さて、寝よう。横になりながらあーしは何だか、ウキウキしていた。あーし、ヒキオと遊ぶのが楽しみなん？

結衣や雪ノ下さん、生徒会長が惹かれるくらいだ。

なんだ、ヒキオぼっちじゃないじゃん。むしろ超モテてるじゃん。

あいつのどこが魅力なんだし。

あーし、ヒキオのこと気になってるのかな？

f i n

あーしはヒキオと。

カールよし。化粧よし。服よし。今日は、いい天気だ。早くつきすぎたし。まだ30分あんだけど。仕方ない、待ってるか。って思ったけど、ヒキオもう居んじやん。

「ヒキオ。待ち合わせまでまだ30分あるけど」

「お前だつて30分前に来てるじゃねえか」

「そ、それは！ たまたまだし！ つか、それを言ったらヒキオもつと前から居るんじゃないの？」

「違えよ。今来たところだ」

「そのかつこよさそうなセリフなんだし」

「俺が言うのと台無しみたいな言い方やめて？」

「実際そうっしょ。服はいい感じだけど」

「服はつて……お前も、その、なんだ。いい感じだな」

「ふえっ!? う、うん。ありがと……」

「……いくか」

「う、うん」

「なんで、あーしこんなキヨドってるん!? ヒキオと逆じゃん! 意識してるみたいで
なんか複雑だし。」

× × × × ×

「ヒキオ。今日は、ちゃんと話すこと。いい?」

「え、なに。いきなり」

「この前帰ったときは、全然喋らなかつたじゃん?」

「当たり前だ。俺はぼっちだぞ」

「だから今日は話すんじゃん。せつかくあーしと出かけてんだし、それくらいしな」

「なんでそんな偉そうなんですかねえ」

「なんか言つた?」

「なんでもありません!」

「んじや、よろしく」

さて、ヒキオは何を話してくれるだろうか。これで、つまらなかつたら笑つてやろう。

「んで、今日は何するんだ?」

「んー。服見るつしよ。そーいやヒキオつてどんな服好きなん?」

「どんな服か。俺はあんまそういうのわかんねえ」

「それ、自分で選んだじゃないの?」

「これか？これは小町に任せたんだよ」

「妹さん、苦勞してるし。でも、いいセンスしてんじゃん」

今日のヒキオは、ボーダーシャツにネイビーのジャケットを着ている。

こいつ、こういうキレイ系結構似合うし。

「お前には敵わねえよ。よくそんな服来てるわな」

「ど、どこ見てるし！」

あーしは、オフショルダーを着ている。

そのせいもあつてか、ヒキオは肩や胸元をチラチラ見ている。

まあ、男だし仕方ないか。

「うっ、その、すまん」

「べ、別に、いいし」

「その言い方だと、見ていいことになるんだが……」

「そ！ そういうことじゃないし！ つか、真昼間から何の話をしてるし！」

話せと言つてこんな話になるとは思わなかつたし、まあ、いいっしょ。

× × × × ×

「この服、可愛いっしょ」

「そうだな」

「こつちもいい感じ」

「なるほど」

「これもいいじゃん」

「確かに」

「どれがよかった？」

「そうだな」

「ヒキオ？」

「なるほ……」

「ちゃんと聞いてた？ アンタ全然聞いてないっしょ？」

「俺に言われてもわかんないしな」

「じゃあ、聞き方変えるし。こつちとこつちどつちがいい？ 着てみるから見て。あと

着替えてる間にどっか行くんじゃないよ」

「ど、どこもいかないからね？」

「ふーん。まあいいし。ちよつと待ってて」

まずは、少し露出高めにおへそ出した服から。

ヒキオがどんなリアクションするか、揶揄ってやるし。

「じゃーん。どうよ？」

「あ、ああ。いいんじゃないか？」

「ちゃんとあーしのこと見てる？」

「見てるっつの」

「じゃあ、なんで目逸らしてんの」

「これは、アレがアレでアレなんだよ」

「意識してるんー？」

「バツカ違えよ！ 目のやり場に困るんだっつの」

「なっ！ どこ見てるし！」

「いや、悪いの俺じゃないよね？」

「ま、いいや。次」

あーしってば、何で照れてるし！ 椰揄うどころか、こっちが椰揄われた気分だ。次

は、露出抑えめ。キレイ系コーデ。

「はい、お待たせ」

「おう、待った、ぞ……」

「なんだし」

「いいと、思うぞで」

あれ、露出は少ないのにヒキオが目を逸らす。何だか変な空気だが、かき消すように

店員が来た。

「お客様！ 先ほどから見ておりましたが、すごく綺麗ですね。彼氏さんのにも露出控えめの方が安心しますよ〜」

ツツコミどころ満載な店員だ。って、ヒキオつてばあーしが彼女だったらつて考えてくれてたん？ だったら、こういう服の方が確かに他の男寄つて来ないし安心か。

って、なんでヒキオを意識してるし……

「ちよつと店員さん？ 俺別にそんなこと考えてませんからね？ あと彼氏じゃないですし」

「そうなんですか？ じゃあご夫婦ですか？」

「は!？」

ヒキオとあーしが結婚……あーしがヒキオの事を尻に敷いてそうだ。我がまま言つても、なんだかんだ受け入れてくれそう。

って、何考えてるし！

「あーしら、まだ付き合つてないし！」

「まだ？ ですか？」

余計なところで鋭いし……天然なら天然らしくポカーンとしてればいいのに。

「えつと、何でもないし！ と、とりあえず！ これ、会計して！」

「お買い上げありがとうございます！ レジまでお願いします」

× × × × ×

「お待たせ」

「お、おう」

「あーし、お腹空いたし」

「そか。じゃあ、サイ……」

「サイゼとか言ったりしたら、どうなるかわかってるっしょ？」

「いや、冗談だつて」

ホントかね。結衣曰く、サイゼとあの黄色い缶のコーヒー大好きらしいし。

「じゃあ、あそこにするか」

ヒキオの選んだ店は和食屋さんだった。サイゼが選択肢から消されて選んだのが和食つてのは、落ち着いてるヒキオらしいのかね。しかも、ヘルシーなプレート料理とかある当たり女子ウケいいし、そういうところやっぱあざといし。

「シヤレてんじゃん。ヒキオもやれば出来んだね」

「なんか美味そうだったからな。たまたまだ。たまたま」

「ふーん。確かに美味しそうだし」

お昼のピークを過ぎていることもあって、すぐ入れた。

「ヒキオは何食べるし」

「俺はこの『南蛮揚げ定食』にする」

「じゃ、あーしこの『豆腐ハンバーグ定食』にするし」

「ご飯の種類があるらしく、あーしはキヌア入りご飯でヒキオがひじきご飯。揚げ物にひじきご飯って結構重そうだけど、やっぱその辺は男だなあと思ってしまった。ってか、ヒヨロいヒキオのどこにご飯入ってくんだし。なんで太らないんだし。」

あーしの食べるキヌアは、いわゆるスープーフード。なんかめっちゃ栄養満点で、女性ホルモンに効くってどっかの雑誌に書いてあったのを読んで以来、たまに食べる。

「キヌアって、美味しいのか？」

「味はわかんないけど、なんかめっちゃ栄養あるんだし」

「なんだそれ。ざっくり過ぎてわからん」

「スープーフードはモデルさんも食べるし、健康そうっしょ」

「まあ、確かに、そういうことなら、三浦の見た目的にも納得できるわな」

「なっ!?! なんだし、突然!」

「あっ、いや、そういう意味じゃなくてだな」

「じゃあ、どういう意味だし!」

「いや、なんてーか、言葉の綾だ」

「じゃあ、あーしがブサイクだったの!？」

「いや、そうじゃねえよ! お前モデルみたいだから納得って話」

「えっ、あつ、そう……」

「おう……」

「お待たせしました〜! 定食2点お持ちしました〜」

ナイスタイミング。

変な空気をかき消すように、料理がきた。

「いただきます」

豆腐ハンバーグ。味が濃すぎないから、しつこくなくて食べやすい。食べ応えはあるけど、「豆腐が入ってるからカロリー低いし、女子的には嬉しいし。サラダや味噌汁なんかもいわゆる「優しい味付け」だから、メインを邪魔しない。キヌアは……やっぱ味わかんないし。でも、健康にいいんだろうなって感じするし。

「ヒキオ、美味しい?」

「ああ。美味え」

「こっちも美味しいし」

「そうか」

「食べてみ? ほい」

「え、いや、いらん」

「あーしの飯が食えないっての!？」

「その嫌な上司みたいなのなんなんですかねえ」

「さっさと食えし! はい」

「ん、んん」

お、赤くなってるし。そんなに顔赤くされると、こつちまで照れるっての。

「ど? 美味いっしょ」

「まあ、美味いんじゃねえの」

「なんだしそれ」

「あんなことされたら、味なんてわからねえっての」

「あーしに食べさせてもらったんだから、素直に美味いっしょ」

「んじゃあ、美味かった」

「最初からそう言えし」

「(ち)ちそうさまでした」

× × × × × ×

「さて、次はどうすんだ。帰る?」

「帰らないし! そんなにあーしといるの嫌なん?」

「や、別にそういうわけじゃ……」

「そ。じゃあ、いいじゃん。今度はヒキオの服見るし」

「いや、俺のはいいだろ。服とかよくわからんし」

「いいから行くよ」

T o b e C o n t i n u e d . . .

あーしはヒキオに。

それから、あーしとヒキオは、ヒキオの服を見ることにした。

「ヒキオ。普段服どーしてんの」

「母ちゃんが適当に買って来てるのを着てんだ。だからファツションなんて全くわからん」

その割にはオシヤレしてんじゃん。どうということだし。気になって聞いてみると

……

「これは小町が見立ててくれたんだよ。」

「ふーん。林間学校で見た感じからしてオシヤレそうだし、納得したわ」

ということは、ヒキオの趣味ではなく妹の趣味でこのファツションか。全く変ではないけど、違うヒキオも見たい。そんな好奇心が湧いて来たところで、あーしはお店を見つけた。

「……見るし」

「えっ、ホントに俺の服見るのか」

「当たり前だし」

色々メンズの服を見る。そういえばあーし、男の服選ぶのはしたことないな。意識し出したら変な緊張してきた。こんなのヒキオに見られたらなんか癩だし、冷静を保たねば……

「……うら……おい、三浦」

「ふえっ!!? な、なんだし!」

「いや、それは俺のセリフだからね。それ、着ればいいのか?」

「え? あ、ああ、そーだし。これちよつと着てみな。上着は持つとくから」

あーしは無意識に黒のMAーを手に取っていた。ヒキオが羽織る間に、落ち着こうとする。ヒキオが試着する間、あーしがヒキオのジャケットを持つ。

しかし、手に持っているヒキオのジャケットからヒキオの香りがする。男の香りだと思おうと妙に意識してしまう。そのせいで余計な緊張がまた増えたし。

「顔赤いけど平気か? 熱あつたりしないよな?」

「へ、平気だし! それより、服見せて」

「見せても何も着てるだろうが」

「ちゃんと立ってっの」

案外、こういうストリート系ファッションも似合うじゃん。まあ、よく見ると目以外のパーツは比較的整ってるし、当然っちゃ当然なのかな。目以外は、だけど。

「なんだ。変か？」

「変じゃないし。まあ、なんつーか、似合ってるし」

「お、おう」

「なんでこんな変な空気なんだし。確かに服一つでこんなに変わるのはびっくりしたけど。」

「それ、買いなよ」

「三浦が言うなら似合うんだろうし、買うか」

「つたりめーだし！」

ヒキオを待っている間に少し考えていた。あーしは今日楽しかった。もしかしたら、都合のいい女なのかもしれない。それでも、ヒキオと居て楽しかった。隼人の事を忘れたのかと言われたら完全にそうではない。でも、何かモヤモヤがある。

「おい。大丈夫か」

「あ、おかえり」

「おかえりじゃねえっての。何度も呼んでのに返事しなかったろ。具合悪いなら言うてくれ」

「別に。ただ、考え事してただけだし」

「実際考え事をしていたのは本当だ。ヒキオを心配させてしまったのは悪かったし。」

「そか。この後はどうすんだ」

「……もう少し、居たい」

「お、おう」

「景色。夜景が見たいし」

「夜景？ この近くだとポトタワーが一番近いな」

「んじや、ポトタワーいくし」

「わかった」

ヒキオは、あーしのわがまを聞いてくれた。

あーしたちはそのまま、モノレールにのって千葉みなどまで向かうことに。休みの日とはいえど、千葉みなどに向かうモノレール内はほとんど人が居ない。

宙ぶりのモノレールのぶらぶらとした揺れ、たまに聞こえるガコンというレールの音がやけに大きく感じる。日没が近づいてきたのか。昼前から集まって疲れたのか。はたまたお互いに何か思うことがあるのか。いずれにしても、あーしたちはさっきまでの会話はない。

程なくして、千葉みなどに着いた。

「どのルートでいくんだ」

「せっかくだし、海に沿って歩くつしよ」

「あいよ」

人も車も疎らだ。たまに犬の散歩をしている人、ランニングやジョギングをしている人はいる。でも、波の音が聞こえるくらいには静かだし。

「風、強くなって良かったし」

「そうだな」

昼の温かさを残した空気に混ざる少しひんやりした海風を浴びながら、2人でしばらく海を眺めた。

「おめでとー!」

「ふうー!」

急に聞こえた声に2人でびっくりして振り返る。結婚式場があり、締め切り切った窓越しにも関わらず聞こえてきた盛り上がっている声が正体だった。

ヒキオと目があった。なんだし、その顔。

「ふっ……あははははは!」

「ふっ」

思わず、2人して笑ってしまった。お互い変な雰囲気当てられて緊張していたようだ。その緊張の糸が切れた瞬間だった。

「んじゃ、ポートタワーいくか」

「ん」

千葉県民とて、ポータタワーに来る機会はそんなにない。今となつては都内に出る方が便利だし。あーしも最後に来たのは中学生だし。昔、お母さんがお父さんとよくきたつて話をされたことはある。

「あれ、これつてこんな高かつたつけ」

「わからん。俺も最後に来たのは小学生の頃だし」

「あーし中学の頃来たことあるんだけどなあ」

「日の向きとか、なんかそんなんで変わるんじゃないの？ 多分、知らんけど」

「ふーん」

チケットを発売して、エレベーターを待つ。乗ったエレベーターにはエレベーターボーイが居た。ボーイさん除いたら、あーしたち2人だけ。

ゆっくりと上つていく。上に上がつてみると何組か家族連れやカップルが居たが、やっぱ人が少ない。

「西側いくか」

「とりあえずまだ時間あるし、ぐるっと見るつしよ」

「あいよ」

エレベーターから正面には、海がある。下を見れば浜が少しある。工場群もあるし、

暗くなつてから光つて綺麗だといけれど。

そこから、反時計周りに見ていく。ポートタワーは、その高さもあつて海も陸も色々見える。一度海を離れ、陸を見ていく。奥の方は一面の緑で、海景色とはまた違つて楽しい。そごうのマークを見つけ、あの辺りに千葉駅があるとわかる。日中はあそこにならずつといたのか。近いような遠いような。

ヒキオとあーし、普段は全く関わりがないのに、今日は近かつた。依頼だからとは言つてたけど、ヒキオも楽しんでくれたのかな？

「ねえ、ヒキオ」

「どした」

「今日、楽しかつた？」

「おう」

「ホント？」

「そうだな、普段服とか見ないし、飯も美味かつたし、良かつた」

「ふーん、そ。ならいいし」

「なんだ、気を遣つてくれたのか」

「つたりめーじゃん。あーしが頼んだ依頼とはいえ、あーしだけ楽しいんじゃ面白くな

いし」

「お前、ホントおかん体質だな……」

「あん？」

「いや、なんでもない。優しいって言ったんだ」

「き、聞こえてっから！ 最初から素直に言えっつての。ほら、次行くよ」

「へいへい」

そこから、西側に移動する。日の入りまでもう少し。富士山とスカイツリーの間に沈んでいく。あーしたちは、しばらくゆったりと波を眺め、雲を眺め、飛行機を見て過ごした。

「夕焼け見て、そのまま夜景も見めるのか。なんか、1度で2度美味しいみたいだな」

「実際そうっしょ。時間制限はないんだし、明るい街と暗くなって光る街と違う味を楽しめる方が楽しいし」

夕焼けは綺麗だった。ジリジリと沈んで行く太陽に寂しさを感じる。時期のせいもあって沈むペースが速い。やがて日が沈み、今度は夜景が見るために千葉駅側へ。上から見る千葉も綺麗だ。

「夜は夜でいいし」

「そうだな」

ヒキオのその顔、何を考えているんだろう。一見、無表情のようで何かを考えていそ

うな顔。今日一日で、いや、前に助けて貰った時からかもしれない。隼人に抱いていたものと同じものを抱えてる。

いっそ、聞いてしまおうか。あーしの気持ち。ヒキオの気持ち。

「ヒキオ」

「なんだ」

「あーし、あんたがす……「落ち着け」

最後まで言うことなく、ヒキオがあーしの声を遮る。

「三浦。続く言葉が何であれ、それは勘違いだ。俺は、たまたまあの場においてお前を助けた。けど、それでお前が情けを感じる必要はないんだよ。お前は優しいから、きつと、それこそ気を遣ってんだ」

「なんだしそれ。あーしがバカだったの?」

「誰もそんなこと言ってねえだろ。俺はただ勘違いだつて言ってるんだ。全部たまたまなんだよ。お前に何があつたか知らねえけど、葉山はどうした」

「隼人にはふられた。それで、その日の夜、ヒキオが助けてくれた。最初は勘違いかもしれないって思った。それを確かめるためにも今日出かけたんだし」

さつきまで色々考えてた。ヒキオと一緒にいること。ヒキオを結衣たちから取ってしまうこと。色々考えた。

「でも、それでも、あーしはヒキオと。比企谷八幡と一緒に居たいと思ったんだし。だから、あーしの気持ちを勘違いなんて簡単な言葉で片付けしないで欲しいし！」

「……わかった。少し待ってくれ。俺も頭の整理がついてない。俺なんか言ってくれ
る人がいるなんて思ってた」

「俺なんかなんて言うなし。あーしを選んだ男なんだし、もつと自信持てての」

それに、ヒキオの周りにはたくさん想ってくれる人いるじゃん。絶対本人には言わな
いけど。

「とりあえず、返事はよく考えてからでいいし。今大して考えないで返されるのは嫌だ
し」

「お、おう」

「それで、しつかり考えてから返事ちょうだい。ちゃんと返事しないと、あーし怒っか
ら」

「怖えよ」

「ふふつ。そんだけ、返事が欲しいんだし」

伝えるべきことは伝えた。結衣達にも話をしなきゃいけないし。あーしだけ抜け駆
けなんて嫌だしね。

あーしがヒキオに。前。

それから数日、気分転換がしたくて買い物をしていた。

と言つてもほとんどウインドウショッピングだ。

歩き疲れ、今はカフェで一息ついている。

外に見えるガラス張りのカウンターでダラダラと人を眺めていると、一人の女と目が合う。

髪は青みがかった黒のロングヘア。

川崎沙希。

あーしのクラスではヒキオとは違うひとりぼっち。

最近海老名や結衣が絡んでいる様子から今の考え方は悪かったかな。

そして、一緒に歩いている中学生くらいの男の子と小学生かどうかの女の子に一言言つて、あーしのいるカフェに入ってくる。

「隣、いい?」

「別に。なんか用なん?」

「とりあえず飲み物買ってくるから」

「わかったし」

普段は全く話さないし、奉仕部で出くわした時はお互いに意見が合わなかった。

あーしは、控えめに言つてこの人が得意ではない。

嫌いではないが、単純にソリが合わないのだ。

川崎さんは、席を取るなりレジへ行きコーヒーを頼んで戻ってきた。

「それで、なんか用があつたんじやないん？」

「由比ヶ浜から聞いた。あんた最近比企谷と遊んでるんだつて？」

「だつたらなんだし」

「由比ヶ浜や雪ノ下の気持ち、氣づいてるでしょ」

確かに、ヒキオに対しての彼女達の気持ちは何となくわかつていた。結衣に関しちや

あからさまだし。

彼女達への後ろめたさを感じてか、あーしは川崎さんから目を逸らしてしまった。

「あんた、酷いことしてらつて自覚はある？」

「あんさー、そのどこが川崎さんに関係あるの」

「あるよ。……あたしだつてそうなもの」

少し驚いた。

今までそんな素振りは一度だつて見た事がない。

もちろん、あーしが知らないだけって可能性もあるけど。

ヒキオってば、なんだかんだモテてない？

「でもさあ、あーし以外誰もヒキオに近づこうとしてないじゃん。それって、皆狙う気ないっしょ。待ってたってヒキオから来るわけないじゃん」

「そんなのわかんないじゃない！」

川崎さんの口調が強くなる。

でも、さすがに期待しすぎでしょ。

それでヒキオが来るなら、今頃あの二人のどっちかと付き合ってるだろうし。

どいつもこいつも、甘ったれんなっての。

「はあ。言いたいことはそれだけ？ そんな下らないことなら、あーし帰ってから。ヒキオとどうしようが関係ないっしょ」

「ちよつと！ まだ話は終わって……」

「終わってるでしょ。じゃあね。明日、話に行くから文句あるならそこで言いな」

あーしは我慢出来ず、店を出た。

もうすぐ日が沈む。

あれ？ こんなに寒かったかなあ。

カラつとしてる夕空は、今のあーしには重く感じた。

× × × × × × × ×

Y u m i k o

『結衣。明日集合ね。雪ノ下さんと川崎さんと一色も呼んで。大事な話するから』

昨日、あーしは要件だけ結衣に送りつけた。

カフェでお茶がてら、4人を待った。

皆、待ち合わせをしてきたらしく同時に入ってきた。

揃いも揃って、ホットコーヒーを注文する。

あーしも甘い物を飲む気分ではなかったもので、おかわりはホットコーヒーにした。

「それで、話って何かしら」

雪ノ下さんは少し気が立っている。

まあ、この前は無茶を言ってヒキオを借りたし、今日これだけ集めるなら何を話すの

か察しているのだろう。

「さっそくだけで。あーし、ヒキオに告ったから」

皆、驚いていた。

結衣は相変わらずのオーバーリアクション。

雪ノ下さんは目を丸くした。

一色はじつとあーしを見ている。

川崎さんは息を飲んでる。

「優美子!?　なんでそうなったの!?!」

結衣の言うことも最もだ。

でも、人の心が分かるなら機械はとづくに進歩してるってどつかのテレビで言ってたし。

だから、なんでそうなったかよりもこれからどうするかが大事なんだ。

あーしの気持ち、皆の気持ち。

それぞれ、想うことはあるが、全てはヒキオ次第。

でも、このまま何もしないのもどうかと思うので、あーしは皆に発破をかけることにした。

「あーしだけが言うのはちよつと違う気がするし。だから、皆も言いたいことは言った方がいいし。言わないならあーしが貰っちゃうからね」

「そんな……」

結衣が今にも崩れそうな顔をして喋る。

その後、しっかりと何かを考えた様子だった。

生徒会長と川崎さんは結衣よりもしっかりと顔つきになった。

しかし、雪ノ下さんだけが違う。

少し覇気のない、焦りと戸惑いと諦めの混ざった表情。

「とりあえず、あーし帰っから。いつまでも期待してちやダメだかんね？」

店を出て見上げる空は昨日とは違う曇り空。

空気の重さは相変わらずだ。

× × × × × ×

t o b e c o n t i n u e d . . .

あーしがヒキオに。後。

結衣、雪ノ下さん、川崎さん、生徒会長の4人と話した後店を出たあーし。この1年一緒に居た結衣の気持ちを考えてあーしの気持ちと告白した事を話した。雪ノ下さんも結衣と同じ奉仕部として色々相談に乗って貰った手前、あーしの話はおかなきやいけないと思った。

川崎さんは昨日のこともあったし、ちゃんと話したいと思った。生徒会長は隼人を隠れ蓑にしてヒキオにベタバタしてるし、お互い隼人を意識してたのに気づいたらお互いヒキオを意識してるんだからこいつも言っておかなきやいけないと思った。

4人はそれぞれの驚き方をしてたけど、あーしとしてはちゃんと話が出来て良かったと思う。ほとんど一方的だけだね。

家に向かって歩き空を見ると、真つ黒な雲が覆ってる。いくらもしないで雨が降るかなーって思ってたら降ってきた。傘無いし、閉めかけの文具屋さんで少し雨宿りさせて貰おう。この文具屋さんオンボロ過ぎてちよつと気味悪いけど、こういう時代にも残ってる辺りちよつと老舗っぽい感じあるね。

とりあえず近くのコンビニをスマホで探す。走っても5分・・・これは雨の

弱まり次第だけど、ずぶ濡れは覚悟しなきゃいけないか。少し弱くなるか待ってみる。
なかなか弱くならない雨、人通りも車通りも少ない。色々混ざって薄気味悪さを感じる。

そういえば、ヒキオに助けてもらったあの日も雨こそ降ってなかったけど同じように人が少なかったっけ。

『あーし、急いでっから』

『急いでるならもつと早く歩いてるでしょ？ 嘘は良くないな』

何人かの男に絡まれてた。あの時はほんと危なかったけどヒキオのおかげで何とかなったんだよね。ヒキオは警察官に間違えられてたけどね。

『もうすぐ警察来ますよ。ここ交番から近いですし』

『こここらく。駅前で何を騒いでいるんだい？ 君が女子高生にナンパしてるって男か？』

『ひよつとして君がナンパされている人がいるって通報してくれたのかな？』

『さあ。ちよつとわかんないです。たまたま居ただけなんで』

あの時のヒキオは意味のないところで見栄を張ってたっけ。あーしにはバレバレだつての。思い出して少し声に出して笑っちゃったけど、誰も聞いてないよね？ と辺りを見ると遠くから黒い影が近づいてくる。服は上下黒で、傘も黒。アレは明らかに怪

しいっしょ。普通に怖いし、絡まれないようにケータイいじつとこ。

近づいてきた上下黒の人。やっぱり怖い。何もありませんように。

祈りが届いたのか、歩く速度はゆっくりなもの過ぎ去ってくれた。あーもしかし
て観察されてた……？ だとしたらつけられてた？ とりあえず表情に出ない
ようにしなきゃ。

過ぎ去った方を見ると黒の人は止まった。え。怖い。普通に怖いし。いや、最悪後ろ
の文具屋さんに助けを求めれば……。

「あの、三浦か？ 間違ってたらすみません」

上下黒の人はヒキオだった……。。脅かすなし！ ほんとに！

「ひ、ヒキオ……？」

「おう。よかった。あつてたわ。どしたのこんなところで」

「傘、無くて。あと全身黒の怪しい人が近づいてきて怖くて……」

「暗いもんな。不審者みたいでなんかごめんね？」

確かに不審者みたいだった。そりやそうだ、全身黒で猫背でのっそり歩く。怪しいこ
とこの上ない。

「でも、ヒキオでよかったし」

「そ、そうか。アレだったら送るぞ」

「へ？ あ、じゃあ………お願い」

ちよつとびつくりしたけど、濡れずに済むし怪しい人に絡まれずに済むし、送つてもらうことした。

「しかし、ずいぶん変なところにいたな」

「出かけてて帰る途中で、こんな雨がね。ちよつど良いところに閉まりかけの文具屋さんがあつたから屋根を借りたつてわけ。それでコンビニ行こうとしてたら怪しい人が来たんだし」

「怪しい人で悪かつたな」

「まあ、結果的に傘買う金が浮いてラッキーだけどね」

結構な雨が降る中、家を目指す。時折小話はするものの、さすがヒキオ。あんまり話が続かない。でも、傘と地面に当たる雨の音がある中での相合い傘は乙女的にはエモい。

これで黒の傘じゃ無くてもつと映える色だったらきつともつとエモさに浸つて居たかもしれない。

ヒキオも最初の頃と違い、気まずい感じはないようだ。やつとあーしに慣れてきたのかね。

「ねえ。ちよつと寄つてかない？」

あーしは通りがかつた公園を指さす。雨だから当然誰も居ない。電気が付いてはいるものの決して明るくはない公園だった。

「ん。わかつた」

捻くれた事を何か言うかと思つていたが、素直に受け入れてくれた。

雨はまだそこそこに強く、止む気配はない。時々車が打ちつける雨を潜る音が公園の向こうから聞こえた。少しお互いにダンマリだった。

「今日……」

「ん？　なんだ？」

雨の音であまりうまく聞こえなかったようだ。もう少ししつかり……

「今日さ、結衣達と話をしたんだ」

「そうか」

「それで、あーしの気持ちも、あーしの言ったことを話した。分かつてると思うけど、結衣達だからいう必要があつたんだ」

「ああ」

『結衣達』とは言ったものの、厳密に誰とは言わない。そこまで言つてしまうのは女の子的にさすがに憚られる。分かりきつてる子はともかく、ヒキオの性格上分かりにくい子に関してはあーしの口から言うことじゃないし。

「前にで、デートしてからいくら経ってつけど、あーしの気持ちちゃんとやらせて貰えなかったじゃん」

「それは、その、悪かった……」

「だからねヒキオ。あーしはヒキオが好き」

先週、ヒキオはあーしの言葉を遮った。勘違いだと言ってあーしの気持ちを拒んだ。でも、待つて欲しいと言われた。ヒキオの中で整理がついてない事もあるだろうし、純粋に捻くれた理解をしたのかもしれない。それでもヒキオは考えると言ってくれた。だからこそ、あーしの気持ちをちゃんと聞いたかった。

「ありがとな。三浦。あの時、遮っちゃまった手前、本当は俺から言うべきだったのに、わざわざ言い直してくれてありがとう」

素直なヒキオの言葉。ちよつとびっくりした。

「三浦が想ってくれたこと、話してくれたことをこの一週間、ずっと考えてた。なんで俺なんだろうって。俺は知っての通り捻くれてるから、なんか裏があるんじゃないかって、つい疑ってな……。もちろん、まっすぐ向き合ってくれる三浦にそんなことと思うはずなのに、内心そんな気持ちを感じた」

「ふーん……。そつ」

ヒキオなりに色々考えてくれたのが嬉しいけどちよつと恥ずかしい。ヒキオは頭の後ろをガシガシしながら、そんな話をしてくれた。

「年末にな、由比ヶ浜と雪ノ下と色々話したんだ。本当に色々。その前に平塚先生とも色々な話をした。色々聞いて、色々話して、色々考えて。傲慢だと分かっているけど俺の本心は他人を理解したい。穿った考え方を持つてるのも自覚してる。それでも俺は本物が欲しいと言った」

平塚先生まで出てくるのは驚いたけど、何かと絡んでるし納得と言えば納得か。奉仕部の顧問だし。それに深くは教えてくれなかったけど結衣達とそんなにしつかり話しているとは思ってなかった。

「先週ポータタワーで聞いてくれたろ。楽しかったかって。俺もその、なんだ、楽しかった。1日一緒に居てもっと三浦を知りたいと、もっと一緒に居たいと思った。だから、三浦。俺はその本物が三浦であればいいなと思ってる。」

「俺も三浦が好きだ。俺と付き合ってください」

ヒキオが……ヒキオがここまで考えてくれた。それだけでも嬉しい。その上で告白してくれて。あーしの気持ちが届いて嬉しい。これからあーしがヒキオと一緒にいることが嬉しい。だから、あーしは……

「……はい！」

嬉しくて声が裏返ってしまいそうになる。ヒキオがちゃんと考えて出してくれた答え。ヒキオが考えた上で発してくれた言葉。それにちゃんと答えたい。そんな返事。

「その、なんだ。俺はボツチだから、ダメなところもあると思うけど、許してくれ」

「もうボツチじゃないっしょ。あーしがいる。あーしとヒキオでいる」

「そうだな」

「でも、根っから叩き直してやつから、覚悟しとけし！」

「お手柔らかに頼むわ」

そんなこんなで、あーしとヒキオが恋人になった。

「じゃあヒキオ。帰ろっか」

「おう」

「来年はクラス一緒かなー。あーしも文系だし」

「早速甘々じゃん！　ってか俺の進路知ってたのか」

「結衣が散々言ってたからねー。でも、やっぱり一緒がいいし」

「だな」

公園を後にするあーしとヒキオ。長いこと話していたからか、雨はほとんど降ってない。遠くの方には青空も見えてるし、今日はもう止んで降らなくなるかな。

〈Fin〉